
仮面ライダー電王 読み切り

D a i s y W i g

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

仮面ライダー電王 読み切り

【コード】

N9016B

【作者名】

Daisy Wig

【あらすじ】

不良でいじめっ子の少女・天道未来の下に突如現れた女性・ハナにライダーパスを渡された未来は、電王に変身してイメージンを倒す。
原作と全く違う設定の一発ネタです。

(前書き)

原作と全く違った設定の仮面ライダー電王をやってみました。楽しんで頂けると幸いです。

都内上空に、数個の光りの玉が浮遊していた。その光りの一つが、地上を歩く一人の少年に近付いた。

サー　光りの玉が少年に取り憑き、白い砂を出した。

少年はそれに気付き、後ろを振り向いた。

すると、白い砂から明らかに人間では無い者の上半身が現れ、その上に下半身が現れた。

そいつは、少年に向かってこう言う。

「お前の望みを言え。どんな願いも叶えてやる」

その言葉に少年が驚くのを無視してそいつは続ける。

「お前が払う代償はたった一つ・・・」

都立電王高等学校の校舎の裏に、世界一とても可愛い髪の長い少女はいた。

「先輩！」

そう言っただけで来たのは、少女より少し背の低い少年だった。

「金、ちゃんと持って来たか？」

と、少女は少年に手を差し出した。

しかし、少年は少女の手を払い、首を横に降った。

「先輩、どうして僕からお金を取るの!？」

僕、先輩にお金渡すのなんて嫌だよ！」

ガバツ！　少女は少年の胸倉を掴んで引張った。

「てめえ、5万持って来る約束だろ！何で守れねえんだ!？」

「放してよ？」

「じゃあ明日持って来るか？」

「嫌だつ、あげないよ!！」

「そうか・・・」

少女はそう呟くと、少年を放し、顔面に拳を放った。

ガスンッ！ 少年の頬に少女の拳がヒット。少年は怯んだ。

「持って来いチビ！」

少女はそう言って、少年の腹にキックをした。

「うっ！」

少年は呻き声をあげると、後方に吹っ飛んだ。

「やめてよ先輩！」

少年がそう言って立ち上がると、体から砂が溢れ出した。

「えっ？」

少女は砂を凝視した。

すると、少年から溢れ出る砂から、コウモリ型の怪物、バットイマジンが現れた。

それと共に、少年は驚いて気を失った。

「こいつは俺の契約者でな。好き勝手やられちゃ困るんだよ」

バットイマジンはそう言って、少女に襲い掛かった。

ブンッ！ 少女はバットイマジンに殴り飛ばされた。

「うわああああっ！」

少女は悲鳴をあげ、手足を動かしながら宙を舞い、ドカツと地面に墜落した。

「痛っ、お前何なんだよっ！？コスプレマニアのボディガードか？」

「お前には関係無い事だ」

そう言ってバットイマジンは、少女に歩み寄った。

「悪いがお前には消えて貰うぞ」

と、バットイマジンは踏み付け様とした。

が、しかし、少女はバットイマジンの足を両手でガードし、それを放り投げた。

「うっおっ、とっつとっ・・・」

バットイマジンはバランスを崩し、バタツと倒れた。

「よせよコウモリ！」

少女はそう言うつとすっくと立ち上がり、髪を逆立て、瞳を赤く染

めた。

「俺っ、参上！」

少女はファイティングポーズを決めた。

「掛かって来いよ？俺が相手んなってやるぜ！」

少女はそう言って、手招きをした。

しかし、バットイマジンは、起き上がると直ぐに、倒れて気絶している少年の下に行き、抱えて去って行った。

「おいっ、待てこら！」

と、その時、頭の中で声が響いた。

『お前誰だ？私から出てけ！』

その言葉と共に、少女の体から光体が飛び出し、それが上半身と下半身が分かれた怪物になった。

「お、お前、俺を追い出すなんて、一体何者だ？」

怪物は驚きながらもそう訊ねる。

少女は人指し指を天に掲げ、

「お祖父さんが言っていた。

天の道を往き、未だ来ぬ平和な世界を掴む少女・・・私の名は、

天道 未来、と」

「名前なんか聞いて無え！何で俺を抑えられるのかを聞いてるんだ！」

しかし、未来はシカトして歩き出した。

バサッ 怪物、イマジンは未来に踏み潰され、砂になってしまった。

「待って」

と、未来を呼び留める声が背後からした。

未来はその声に振り向いた。

すると突然、目の前に線路が出現し、電車らしき物体が現れ、中から成人女性が降りて来た。

「私、ハナ。あなたみたいな人、ずっと捜してたんだよね」

自らをハナと名乗る女性は、カードケースの様なものを取り出し、未来に渡した。

それを受け取った未来は、「何だこれ？」
と、訊ねる。

「ライダーパスよ。それを使って、電王に変身してあの怪物を倒すのよ」

「いま・じん？」

そう言っただけで未来が首を傾げると、

「俺みたいなのをイマジンと言っただけ」

と、先程踏み潰されたイマジンが復活して言った。

「て言うか、こいつ何者なんだ？俺の事追い出したぞ？」

「特異点よ」

ハナはイマジンに言った。

「何っ、特異点だとおっ！？かあっ、俺はこんな厄介な奴に憑いちまったってか！」

と、頭を抱え込むイマジン。

「どうでも良いけど、電王って何だよ？」

「説明がまだだったわね」

電王と言うのは、時の運行を変えんとするイマジンからそれを守り、イマジンを倒す者よ。言ってみれば、正義の味方って所ね」

「それで？私にその電王をやれってのか？」

ハナは頷く。

「嫌だね！何が正義だ？そんな面倒な事、やってられっかよ！」

「何言ってるのっ！？イマジンを放っておいたら、この世界は滅茶苦茶になっちゃうのよっ！？もしかすると、あなたも消えるかもしれない」

「言ってる意味が解らん」

「歴史が変わるって事よ」

成る程 未来は理解した。

「要するに、イマなんとかって言う怪物がタイムトラベルをして歴史を変えてしまっただけか？」

「そうよ」

「けど、どうやってタイムトラベルを？」

「デンライナーを使うのよ」

ハナはそう言って、電車を指差した。

「時間が無いの。さっきのイマジン、あの子との契約を成立させてしまっわ。そうなる前に倒さないと・・・」

「どうでも良いがお前、望みを言え！」

そう言ったのは、イマジンだった。

「望み？」

「ああ、どんな願いでも叶えてやる」

「ダメよ言っちゃ！」

「言わねえよ。願いなんて無いし」

ちっ イマジンは舌打ちをした。

「ん？」

と、妙な動きをするイマジンに、未来は訊ねた。

「どうした？」

「来たぜ。イマジンの臭いだ」

「それ、あなたの臭いじゃねえの？」

「違っっ、さっきのコウモリ野郎だ！」

「どっちだっ!？」

未来はそうイマジンに訊ねた。

「こっちだ！」

イマジンは校外へ向かった。

未来はライダーパスをスカートのポケットにしまうと、イマジンの後を追った。

未来が校外に出ると、バットイマジンが少女を襲っていた。

「心！」

未来はそう叫ぶと、バットイマジンに襲い掛かった。

「やめる！」

と、飛び蹴りを放つ未来。

しかし、バットイマジンはそれをかわした。

ちっ 未来は舌打ちをすると、ポケットからライダーパスを取り出した。

「お前、これの使い方解るか？」

未来はイマジんに訊いたが、

「知らねえよ！」

と、彼は言う。

「そうか。ま、何とかなんだろう」

未来はそう言って、適当にポーズを取った。

すると、腰にベルトが出現した。

「変身！」

未来はライダーパスをベルトにセタッチ。電王・プラットフォームに変身した。

「何だこれっ!？」

と、驚く電王。

「ほお、電王か」

バットイマジンはそう口にする、電王に襲い掛かった。

「俺の邪魔をするなら殺してやる！」

と、バットイマジンは先手攻撃をした。

ブッッ! バットイマジンの拳がヒットし、電王は宙を舞った。

「ええいつ、俺と代われ！」

イマジンはそう言いながら、電王に駆け寄った。

「代われつつて、どうやって代わるんだよっ!？」

電王がそう訊ねると、どこからともなくハナが現れ、

「ベルトの赤いボタンを押してイマジンの力を取り込むのよ！」

(ベルトの赤いボタン?)

電王はベルトを調べた。

(これかっ!?)

電王は四つのボタンを見付けると、一番上の赤いボタンを押し、

ライダーパスをセタツチ。

パラパラパララ 音楽が流れ、

「Sword form」
ソードフォーム

その瞬間、イマジンが電王の体内に入り込み、アーマーが出現。
電王はソードフォームに移行した。

「俺っ、再び参上！」

電王はファイティングポーズを決めた。

「貴様、どう言うつもりだ？我々の使命を忘れたのか？」

その問いに電王は、

「使命？忘れたね。て言うか、そんなの最初っから覚えて無えよ。

それに、俺はこう言うのがやりたかつたんだ！」

電王はそう言うと、デンガッシャー武器を組み立て、ソード状にした。

「行くぜえ！」

電王はバットイマジンに駆け寄ると、デンガッシャーを振り回した。

ビュンッ！ デンガッシャーが風を切る、が、バットイマジンにはかすりもしない。

『バカッ、ちゃんと狙え！』

と、電王の頭の中で未来の声が響く。

「五月蠅えっ、俺の頭の中で叫ぶな！」

電王はそう言うと、再びバットイマジンに切り掛かる。

ズバツ！ バットイマジンの羽が切り裂かれた。

「おまけだ！」

電王はそう言つて、ライダーパスをセタツチ。放り投げた。

「Full charge」
フルチャージ

「俺の必殺技、Part one！」

その瞬間、デンガッシャーの先っぽが空中に飛び出し静止する。

「喰らええ！」

電王はデンガッシャーを一気に振り下ろし、バットイマジンを叩き斬った。

次の瞬間、バットイマジンは物凄い爆音と共に爆裂霧散した。電王は、変身を解除すると、未来に戻った。

「ふう、終わった・・・」

と、呟く未来。

「さ、次行くわよ」

ハナはそう言うと、デンライナーが現れ、それに乗り込んだ。

「何してるの？発車するわよ」

ハナはそう言って、未来に手を差し伸べる。

「おう！」

未来はそう発すると、ハナの手を掴んだ。

仮面ライダー電王 読み切り

T
H
E

E
N
D

(後書き)

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9016b/>

仮面ライダー電王 読み切り

2008年8月29日19時33分発行